“Flowers for Algernon”を研究して

鳴　海　舞　己

私達、中村ゼミナールが専門ゼミナールⅡで研究したのは、日本でベストセラーとなった長編小説ではなく、その六年前に発表された中編小説である。この小説は50ページ程度であり、英語も割と簡単で、ストーリーも解り易く、手軽に読めるものであった。しかし、主人公のチャーリー・ゴードンが精神薄弱者であるという設定であっただけに、私は、この小説を読み解く際や、レポートを書くにあたり、何度も壁にぶち当たり、悩むことが多かった。一体、何故、作者ダニエル・キイスは主人公をＩＱの低い精薄者に設定したのであろう。私が出した答えは、作者は障害者を描きたかった。でも、障害者への偏見を取り除こうとしたのでもなく、ただ単に小説の一手法として障害者を使用した、ということである。この小説を読み始めた時は、障害者への偏見を取り除く、というねらいも多少は含まれるだろう、と考えていたが、それは全く誤った見解であることに気付いた。この小説を読み、一体どれだけの人が障害者に対する偏見を捨てることが出来たのだろう。ただ、可愛そうな人達だと感じただけの人がほとんどではないのだろうか。もし、そうだとしたら、それは同情でしかない。可愛そうだ、と感ずること自体が偏見である。要するに、この小説で偏見を取り除こうとするのは、ほとんど無理であるといえよう。もし、偏見を取り除くといった目的が少しでもあったならば、もっと別の有効な手法があっただろう。この小説は、日本ではベストセラーとなり、多くの人達に感動を与えた。しかし、この作品の魅力は一体どこに存在するのであろう。私は、この小説は、主人公が精神薄弱者という設定なので主に、福祉の目でこの本を読み解き、社会福祉を根本に置き、研究した。しかし、何の専門知識も持たないであろう多くの読者は、この作品を読むことで、自分の知らない、又は知らなかった障害者の世界に触れ、あたかも理解した様な錯覚に捕われるのではないか。そして、主人公のチャーリーに、アルジャーノンに同情し、涙を流す。この小説は、日本人にとって、ただの感動小説でしかないのやも知れない。文学には正解なんてないし、どう読みとるか、どう解釈するかは、読者個人に委ねるべきだし、又、本も元来感動出来れば、心に刺されば、その人にとってよい本なのだから、そういう読み方を否定する気はない。だが、この小説が、ただの感動を呼ぶ小説としてしか評価されていないのならば、作者の意図とは全く駆け離れたところで、小説だけが一人歩きをしている様な気がしてならない。

（指導教員　中村　敦志）